

イチゴの新品種について ①

「はるよい」の特性と栽培上の問題

野菜試験場久留米支場
育 種 第 2 研 究 室 長

本 多 藤 雄

イチゴの生産が増え、イチゴの作型、育苗や栽培様式が試験場技術として開発され、農家に浸透し、「ダナー」、[宝交早生]、「はるのか」の3大品種の栽培が、各地に確立定着して10年以上を経過した。消費の拡大とともにイチゴの価格もかなり平準化される傾向にあるが、それでも12月を中心とした出荷期の価格は高く、できるだけ12月に収穫の山をもってきて、2~3月までに多く収穫する促成栽培が望まれるようになってきた。

「はるのか」の出現によって、12月から3月に収穫できる暖地の促成長期どり栽培が、極めて有利な作型として定着したが、「はるのか」は抜群の良品質によって、イチゴが輸送果実の1つとして、九州から関西、関東、更には北海道市場まで出荷され、また今度の食品成分分析改訂表でみられるとおり、イチゴは施設野菜のなかで、炭水化物、糖分およびビタミンC含量が多いなど、栄養的にも優れた果実となっており、他の果物を抑えたことも事実である。

しかし最近になって、収量の少ない「ダナー」や、「宝交早生」に代わり、更に「はるのか」栽培を脅かす新しい品種が育成され、各地で話題を呼んでいる。その品種の1つが「はるよい」であり、もう1つが「てるのか」である。この新品種について解説したい。

1. 「はるよい」の特性と栽培上の問題点

1. 「はるよい」の特性

「はるよい」は農林14号として、農林水産省野菜試験場久留米支場から、昭和55年発表された。「はるのか」と「宝交早生」の組合せによって育成された品種で、「はるのか」の改良種であるとともに、12月から3月までの価格の高い時期に、安定して収量をあげるということで、「春宵値千金」の俗諺のように、「はるよい」を栽培することによって、高い収益が上がるからつけられた。

この品種の第1の大きな特徴は甘味が強く、酸味も適度で香気高く、非常に美味しい果実をつける事である。

学名が香気が高いとされているように香気の高いことは、イチゴにとって最大の要因である。香りが高く、甘味の強い果実には、果色が明赤色ないしは橙赤色のものが多く、この品種の果色も明赤色で、「宝交早生」や「麗紅」のような濃赤色の果実に比較すると、色が淡いといわれるが、蛍光灯の下でみると明るい色に見える。糖度そのものが「はるのか」のように高くはないが、「宝交早生」や「麗紅」よりはかなり高い。また「ダナー」のように酸味も適当にあって、「ダナー」の食味に似ていてはるかに美味である。「宝交早生」に比べるとやや酸味がある。甘酸適度という表現がぴったりしている。

第2の特徴は低温に強く、奇形果の発生が少なく、商品化率の高い、大きいしかも硬いしまった果実を、早くから連続して着果するので、収量が多く、省エネルギー型促成栽培向き品種である。

農林水産省の系統適応性検定試験の各場所で、対照品

種の「はるのか」、「宝交早生」、「芳玉」、「ダナー」等すべての品種に対し、「はるよい」は商品化率が高い結果を得ているように、果実が大きくよくそろる。

またこの品種の選抜過程で、紫外線カットフィルム被覆という、ミツバチのほとんど飛ばない条件下で、ほとんど奇形果がなかったという。ミツバチの飛びにくい低温下でよく着果し、かえってミツバチが多いと、果実の先端が熟れにくいともいわれている。

低温に弱い「宝交早生」が、0~-1°Cで低温障害を受けるのに対して、-2~-3°Cで障害が発生するように、低温に対しても強く、九州では無加温二重被覆で十分に栽培可能である。

第1果房の花芽の分化は、「はるのか」より遅いが、「宝交早生」より早く、普通育苗で9月20日前後、収穫始も12月上旬から可能で、高冷地育苗やポット育苗など、花芽分化の促進を行えば、11月下旬から悠々と収穫できる。果房当たりの着果数も、「宝交早生」程度で多い。また第2果房の花芽分化までは25~30日で、「はるのか」や「宝交早生」がほぼ30日で、場合によっては遅れるのに対して、「はるよい」は安定している。

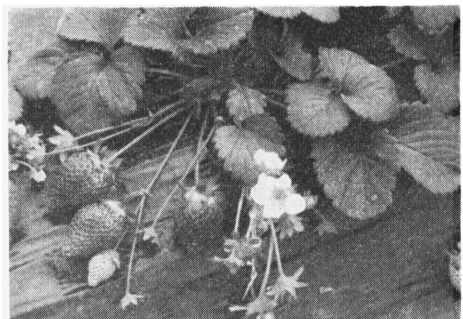
休眠は極めて浅く、「はるのか」程度で、「はるのか」より立性のため、やや密植できるが、電照栽培では伸びすぎて、果色が淡くなりやすい。

第3の特徴はうどんこ病抵抗性を持ち、草勢が強いため、ランナーの発生が多く、栽培しやすいことである。「はるよい」は、系統適応性検定場所で促成栽培を実施した全場所で、適または有望とされたように、またその後試験を実施したほとんどの場所で、果色がこれまでの品種と特異な点を除けば、収量、品質、作りやすさの点で、これまで最高とされている。

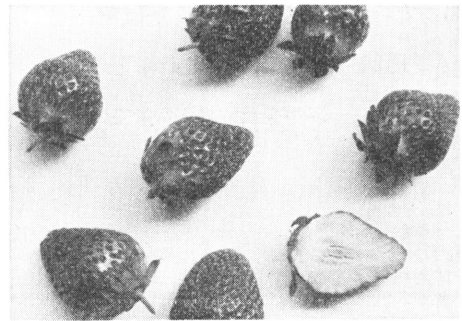
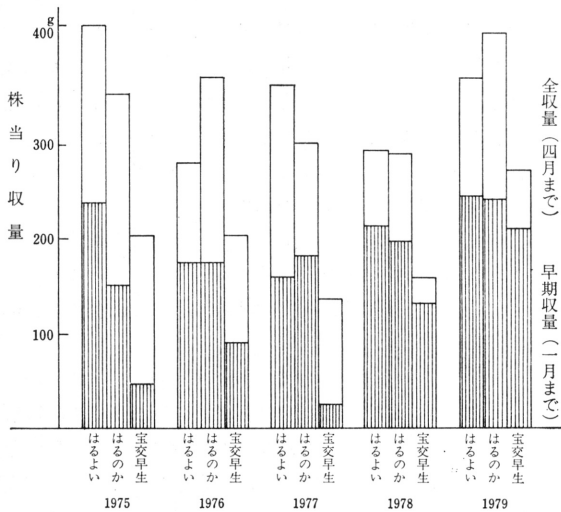
2. 適応栽培と栽培上の留意点

休眠が浅く、しかも花芽の分化が早いので、促成栽培に適應する。低温に対して強く、しかも着果が安定しているので、比較的低温の無加温二重被覆栽培でもできる。休眠が浅く、立性であり、葉が大きいので、電照を行わなくてもよいが、長期間連続して収穫し、わい化を

「はるよい」の苗の育ち具合



図一1 促成栽培における「はるよい」の収量調査



ん酸は窒素と等量かやや多めとする。残りは収穫に応じて液肥で追肥する。栽培は110~120cmうねに2条、20cmに千鳥植が標準である。

ビニル被覆は平均気温が17℃以下になって行い、被覆後は常に25℃以上にならないように、早めに換気する。マルチはビニル被覆後3~5日に行う。「はるよい」の株疲れを防ぎ、しかも連続して大果を収穫するには、9月下旬から10月中旬にかけて乾燥させないことで、かん水に注意したい。

果色が明赤色で、冬季日照の少ない地帯ではやや淡色になることがあるので、必ず換気をよくし、ビニルは清潔に保って、採光をよくし、下葉つみはできるだけ早めに行って、果実に光をあてるように心がける。マルチやハウスの北面に反射光を利用できるようなシルバーポリやアルミ蒸着フィルムを利用するのもよい。「はるよい」は、先端よりへたに近いところから着色する場合も多いので、他の品種より1~2日遅く収穫すれば、着色もよくなる。果実のしまりがよく、光沢もあるので、収穫適熟期の判定が、品質を左右するものと考えられる。

「はるよい」は、日本全国の10月中下旬に、ビニル被覆を行う促成栽培に適用し、品質が硬く、しかも食味に優れるので、今後、品質を重んじる果物として最も有望と考えられる。

防ぐために電照を行うとしても、休眠に入ったあとの11月15日以降12月上旬に開始し、「宝交早生」と同期に開始してはいけない。10月の温度が高いときは休眠入るのが遅れるので、11月下旬に電照を開始する。

育苗は「はるのか」に比べ、ランナーの発生は少ないので、必ずランナー用の専用親株を準備する。3月下旬よりビニルトunnelを被覆すれば、採苗時の6月下旬には株当たり200本は十分に確保できる。促成栽培に適用する苗は、遅くとも6月下旬までに根を下ろした葉数2枚以上の苗で、採苗は遅くとも7月中旬までに終える。

8月上旬までにできるだけ苗作りをし、8月中旬以降、窒素が切れるように、基肥量を規制し、雨が少なきときは、できるだけかん水をして窒素を流す。6月採苗のときから、ポットで育苗したり、8月中旬に無肥料のベッドに仮植すると、窒素を切りやすい。地床ではできるだけ基肥量を少なくし、8月上旬の葉色が淡く、生育が遅いときには、液肥の500倍で追肥を行うが、葉色は8月中旬以降、黄化してくることが大切である。

ずらしの適期は8月20日前

後に、葉が一次期にしおれる程度に強く行いが、降雨などで、ずらしの効果が少ないと考えられるときは、8月下旬にもう1度実施する(ずらしは少ないほどよい。この方法で、9月20日前後に花芽が分化する。定植は花芽の分化を

第1表 促成栽培品種の開花期、収穫始め、a 当たり収量(千葉)

品 種 名	開花期 月日	収 穫 始 日	着 果 の多少	果 梗 の長さ	前期収量		合 計	1 果 平均重
					(12月~1月)	(2月~3月)		
b-39-15	11.28	12.10	多	中	69.6ab	82.3c	151.5d	9.4
長崎クイーン	11.18	12.23	〃	長	77.7a	33.7d	111.4d	9.4
明 宝	11.23	12.23	少	中	59.3c	128.3b	187.6bc	10.1
はるよい	12.29	1.1	中	長	63.2bc	181.8a	245.0a	11.3
てるのか	12.2	1.2	〃	短	72.5ab	97.9c	170.4bc	10.0
麗 紅	12.8	1.23	〃	長	9.3d	194.0a	203.3b	10.6
宝交早生	12.9	1.16	多	中	13.9d	86.2c	105.5d	8.6

顕微鏡で確認後1週間以内に、遅くとも9月下旬までに行う。肥料は基肥は窒素、加里は成分で6~8kg/a、り

開花期は供試全株の頂花房の第1花が80%開花した日。同一記号を有する値の間の差は5%水準で有意でない。